意味機能別文型から見た大学生の作文の文型使用傾向

木戸　光子　　湯本　かほり

要　旨

本研究では、文型辞典や作文教科書に「文型」として抽出された言語形式について、日本の大学の文章表現の授業で大学生が書いたレポートとエッセーを対象に、「文型」の使用頻度による使用状況を調べた。文型の使用頻度によって高頻度に使用される「基本文型」と低頻度であっても使用可能な「発展文型」という2種類の文型に分類した。日本語習熟度による初級・中級・上級といったレベル別の文型の分類ではなく、目標とする文章作成のための重要性に基づく文型の分類を提案する。
【キーワード】文型　使用頻度　作文　レポート　エッセー

Tendency of University Students to use Grammatical Patterns in their Japanese Compositions on the Basis of Semantic Functional Sentence Patterns

KIDO Mitsuko, YUMOTO Kahori

【Abstract】In this research, we examined the frequency of use of grammatical patterns extracted from a Japanese dictionary of grammatical patterns and a composition textbook in reports and essays written by university students. We classified these sentence patterns as “basic sentence patterns” and “developmental sentence patterns” according low-or high-frequency of use. We suggest a classification of the sentence patterns according not to achievement levels such as elementary, intermediate, or advanced but to the importance for sentence making by the use frequency of sentence.
【Keywords】sentence patterns, frequency of use, composition, report, essay

１．はじめに

大学で勉学する日本語学習者が作文を書く際、作文教科書にある文型や学習者用の文型辞典の文型を参考に作文に必要な表現を学習することがある。非母語話者である学習者を対象とした辞典や作文教科書では、言語使用における高頻度あるいは重要度の高い機能表現として特定の文法的な機能を持つ言語形式を「文型」として抽出しているものが見られる。このように「文型」として抽出された形式は、「型」として特定されるものの、品詞のような文法的な性質を帯びた単位に従って分類されない形式もある。そのため、日本語教育の辞典や作文教科書の「文型」は特定の言語的な性質に基づく分類ではなく、学習者の言語使用における便宜性を考えて、特定の意味・機能を担う言語形式として捉えられているように見える。そのような学習のための「文型」でも、一端抽出されて辞書や教科書に「文型」として載せられると、それらの「文型」の定義や例文は規範として提示され、学習される。

しかし、このような規範となった「文型」は学習者の言語使用に必要不可欠な表現なのだろうか。作文に有用な表現として作文教科書に挙げられた「文型」、また、読解や作文など理解や表現に際して文型辞典に挙げられた「文型」のすべてが学習者の作文で使用されるわけではない。では、学習者が作文を書くのに最低限必要な言語資源としての「文型」はどのようなものでどの程度の数なのだろうか。言語使用の実態から出発した作文教育の構築のためには、大学生の持つ言語資源としての「文型」使用の実態調査が必要である。

そこで、本研究では、文型辞典や作文教科書に「文型」として抽出された言語形式について、日本の大学の文章表現の授業で大学生が書いた課題作文のレポートと自由作文のエッセー（英語のessayではなく日本語の随筆的文章）を対象に、「文型」の使用頻度による使用状況を調べる。これらの課題作文と自由作文に関して、日本語文型辞典に基づいて作成した意味・機能別文型の使用傾向を報告する。この調査から「文型」が実際の作文で使用されるかどうかの検証を行う。この検証により、作文という表現活動に必要な「文型」のあり方を考察する。

この調査結果を踏まえ、文章の種類別に高頻度に使用される「基本文型」と低頻度であっても使用可能な「発展文型」という２種類の文型に分類する必要性を指摘する。日本語習熟度による初級・中級・上級といったレベル別の文型の分類ではなく、学習目標とする特定ジャンルの文章の使用頻度による文章作成のための重要性に基づく文型の分類を提案する。

２．作文学習おける「文型」の意味

２．１　「文型」の捉え方

「文型」という名称は日本語教育の文法教科書や作文教科書では一般的に一定の言語形

式と文法機能が固定化した表現を指していると見られる。「初級文型」「中級文型」という名称で呼ばれる表現を見ると、言語形式が特定の文法機能を担っていて、文法規則というより表現の一定の型として慣用句のように捉えられている。文構造に基づいて、文への組み立てに必要な文法機能を解明するという観点から文法を捉えた場合、品詞などの一定の文法単位を基準としないこれらの「文型」は認定基準が恣意的であり、言語単位として不明確で学習の便宜上のものに見えるかもしれない。

しかし、文章構造に基づいて、文章への組み立てを解明するという観点から文法を捉えた場合、文章の中での文章展開機能や構造の指標を担う言語形式は「文型」と呼ぶことができる。つまり、作文における「文型」は文章展開機能を担う表現だと言える。

作文教科書の定義や理由などの「文型」の例は、文への組み立てではなく文章への組み立てを意識した名称であると考える。例えば、文構造に基づく場合でも「～というのは～ことである。」は定義を表す文型だと言える。しかし、文章では前後の文脈の必然性からある物事を定義することが必要になるため、文章の中に定義の文型が組み込まれるのである。したがって、作文教科書での定義の文型は、段落や文章の中での展開機能を担う要素として扱われる。作文を書くとき、「～というのは～ことである」という「文型」を用いて文が書けても、その文が 1 文だけ独立して書けるだけでは作文を書くことにならない。複数の文からなる文脈のある文章の中で適切に定義の役割で「～というのは～ことである」という「文型」を用いることができてこそ、作文で使用可能な表現になると考える。

また、調査対象とする「文型」には文章の中で初めて文章展開機能を担う表現も含まれる。文への組み立てではなく文章への組み立てを担う要素として捉えたとき、一見、文章構造には直接関係ないような言語形式が文章の中に組み込まれると、文章での展開機能が顕在化する場合がある。例えば、「と思う」は意見文でしばしば見られる表現だが、意見を和らげる緩和表現か、逆に個人の意見を押し出す強調表現かは 1 文のみ見ても判断がつかない。このように文章の中で前後の文脈を伴って用いられることによって機能が特定できる表現がある。

本稿では以上のような文章展開機能を担う表現を広義に捉えて「文型」と呼ぶことにする。文型辞典や作文教科書の「文型」という名称に含まれる表現には、いわゆる品詞の他に、複数の語句が文の冒頭と末尾で組み合わされたものなども含む。このような「文型」の捉え方により、機能語や機能表現のような名称を用いないことにする。ここで言う文章展開機能とは前後の文脈によって顕在化されるもので、文章として構造化されていく過程で現れる構造上の役割を指す。

本稿で調査対象とした「文型」すべてが文章展開機能を担うわけではない。しかし、文型として抽出された言語形式の作文での使用頻度を調べることによって、文章を書く上で必要とされる表現は何か、作文に有用な類型化された言語形式としてどのような表現を抽

出すべきかを検討する一つの指針となると考える。

2．2　文章における「文型」

文章における「文型」の意味を考える上で重要なことが２つある。一つは、文を組み立てることと文章を組み立てることの違いである。文の構造を解明することを目標とする文法研究では、文章への組み立てに重要な言語形式の文法機能の研究は、対象とする表現が接続詞や指示詞などその言語形式自体が１文を超えて運用される表現の場合のみに限られることが多い。

もう一つは、規則としての処理と慣用表現としての処理の違いである。文章から出現頻度の高い言語形式を抽出して規則化し、あるいは慣用表現として収集する。その際、規則化とは特定の言語形式が文章の中で一定の機能を有することである。一方、慣用化とは特定の言語形式が規則化される前に機能表現として固定化されることである。したがって、規則化は複数の言語形式に適用され、規則さえ覚えていれば言語形式はいくらでも再生産できるので、規則によって再現される言語形式をいちいち覚える必要はない。それに対して、慣用化は特定の言語形式にのみ適用され、表現とその意味・機能があたかも慣用句を覚えるように記憶される。

作文学習には作文作成に有用な規則化・慣用化された表現の特定が重要である。文章を書くために有用な表現の抽出が必要で、それは規則化、あるいは慣用化することによって学習の効率化を図ることを意味する。特に、母語話者ではない日本語学習者にとって、直観に頼らないで言語形式の規則化、あるいは慣用化による学習は重要である。規範となる文章を真似て書くことが難しく、文章のどの部分、すなわち「型」を真似るべきか、そのような「型」の抽出が自分でできるとは限らない。その結果、元の文章をそのまま抜き出して書き写すだけの作文を書くというその場限りの再現力のない作文学習をすることもある。

したがって、「文型」とすべき表現を言語研究の観点だけではなく、学習者の言語使用の観点から認定することが作文学習にとって重要になる。

３．作文の文型使用状況の概要

３．１　作文の文型使用調査

調査対象とした作文データは、2000年に日本の大学の商学部１年生に筆者の１人が担当した文章表現の授業で収集したものである。受講者のうち授業の全作文の研究使用承諾を得た学生33名（うち３名は日本語を母語としない留学生）の作文を調査対象とした。ただし、欠席のため作文未提出の場合もある。本研究の分析対象はこのうち、「～をどのよう

に利用すべきか」という題の課題作文のレポート28例、および、「～と私」という題の自由作文のエッセー33例である。

文型辞典の文型は、『教師と学習者のための日本語文型辞典』（グループジャマシイ編、くろしお出版、1998年）にある中上級日本語文型161項目に基づいて作成した意味機能別リストの全1213文型を対象とした。また、作文教科書の文型は、『大学・大学院留学生の日本語④論文作成編』（アカデミック・ジャパニーズ研究会編、アルク、2005年）の全180文型を対象とした。なお、上述の文型辞典と作文教科書の双方に共通する文型は66文型であった。文型の意味・機能の分類は上記の文型辞典と作文教科書の記述に従った。以上の作文と文型を対象に、作文の文型認定を行った。

3．2　文型辞典の文型使用状況

作文における文型の使用頻度の全体的な傾向を見るために、課題作文のレポートと自由作文のエッセーについて文型辞典に基づく意味機能別リストの全1213文型について作文での使用状況を調べ、表にまとめた。

表１と表２はレポートとエッセーの文型総使用数上位10位を並べたものである。これより片方の作文に使用頻度が高い文型と双方に使用頻度が高い文型とに分かれることがわかる。片方に使用頻度が高い文型は特定の文章の種類に使用頻度が高い文型の可能性がある。一方、双方の作文に使用頻度が高い文型は文章の種類にかかわらず使用頻度が高い文型の可能性があることから、どの作文にも必要な基礎となる文型の可能性が考えられる。「や」(列挙)、「から」(起点・由来)、「も」(付加)、「しかし」(逆接）がこれに当たる。

表１　「～をどのように利用すべきか」文型総使用数上位10位

	意味・機能	文型	総使用数
1	例示	など	134
2	話題	とは	102
3	列挙	や	82
4	対象	について	71
5	起点・由来	から	66
6	付加	も	59
7	説明・理由	また	50
8	逆接	しかし	48
8	当為	べき	48
10	可能性・不可能・能力	ることができる	40

表２　「～と私」文型総使用数上位10位

	意味・機能	文型	総使用数
1	付加	も	56
2	起点・由来	から	38
3	逆接	が	32
4	逆接	しかし	31
5	立場	にとって	23
6	前置き	が	22
6	例示	ような	22
6	列挙	や	22
9	所有	の	20
10	受益	てくれる	18

表３と表４は日本人大学生と留学生の使用文型数を集計したものである。これより日本人大学生の作文では文型辞典の全文型の20％前後のみ作文に使用されていることがわかる。逆に、約80％は未使用である。参考までに留学生の作文３例の文型使用数は10％以下である。

表３　文型辞典における使用文型（全1213文型）

「～をどのように利用すべきか」		「～と私」	
日本人学生	留学生	日本人学生	留学生
17％	7％	22％	5％
206	81	261	56

表４　留学生の日本語における使用文型（全180文型）

「～をどのように利用すべきか」		「～と私」	
日本人学生	留学生	日本人学生	留学生
14％	7％	12％	3％
26	12	21	6

以上より文型辞典の文型について限られたもののみ作文に使用されている実態がわかる。限られた調査数ではあっても特定の文型に使用頻度が集中する傾向は予想される。文型辞典にあるすべての文型を作文の表現のための文型として学習する必要があるかどうか検討が必要である。

３．３　２種の作文の文型辞典と作文教科書の文型使用延べ数の比較

日本人大学生の文型辞典と作文教科書の文型について使用頻度の高い文型順に並べたものを２種の作文について図１から図４にまとめた。

図１　日本人大学生作文の文型使用延べ数（『文型辞典』）「～をどのように利用すべきか」

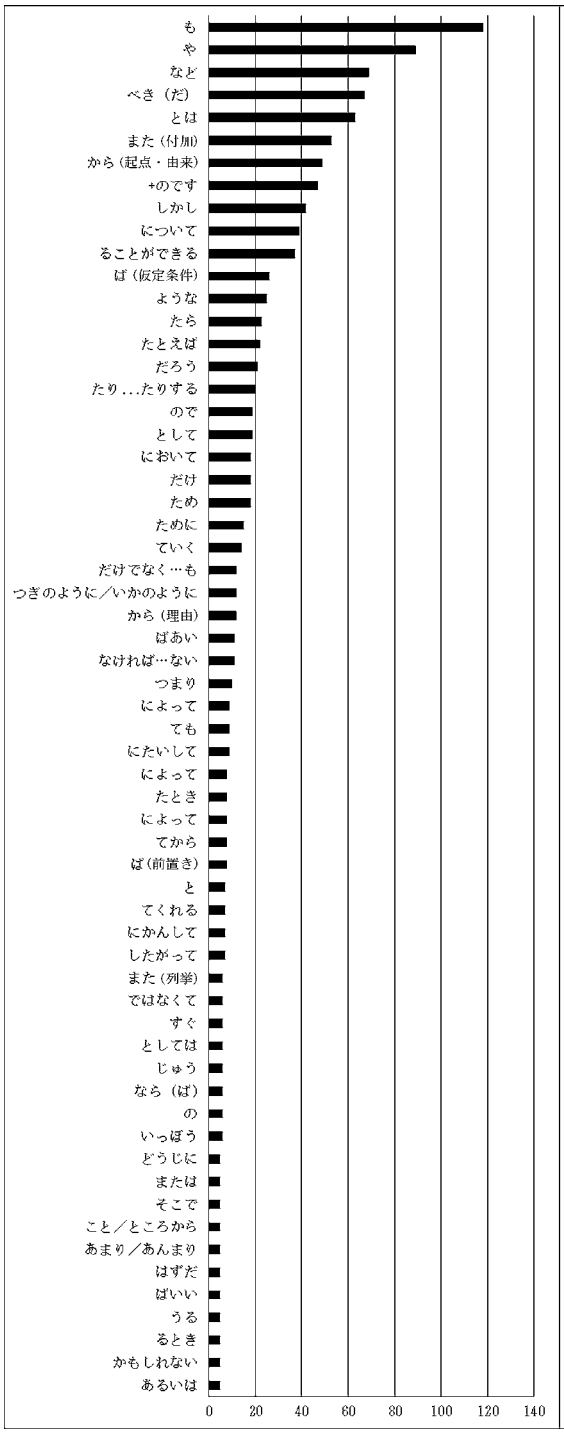


図２　日本人大学生作文の文型使用延べ数（『文型辞典』）「～と私」

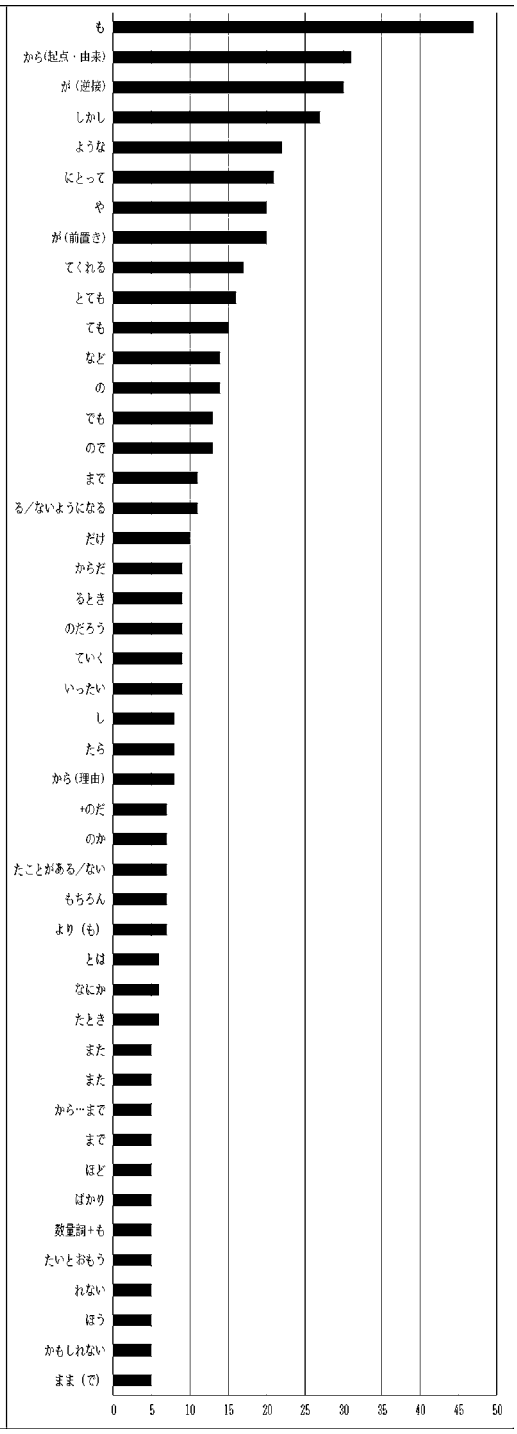


図３　日本人大学生作文の文型使用延べ数（『留学生の日本語』）
「～をどのように利用すべきか」

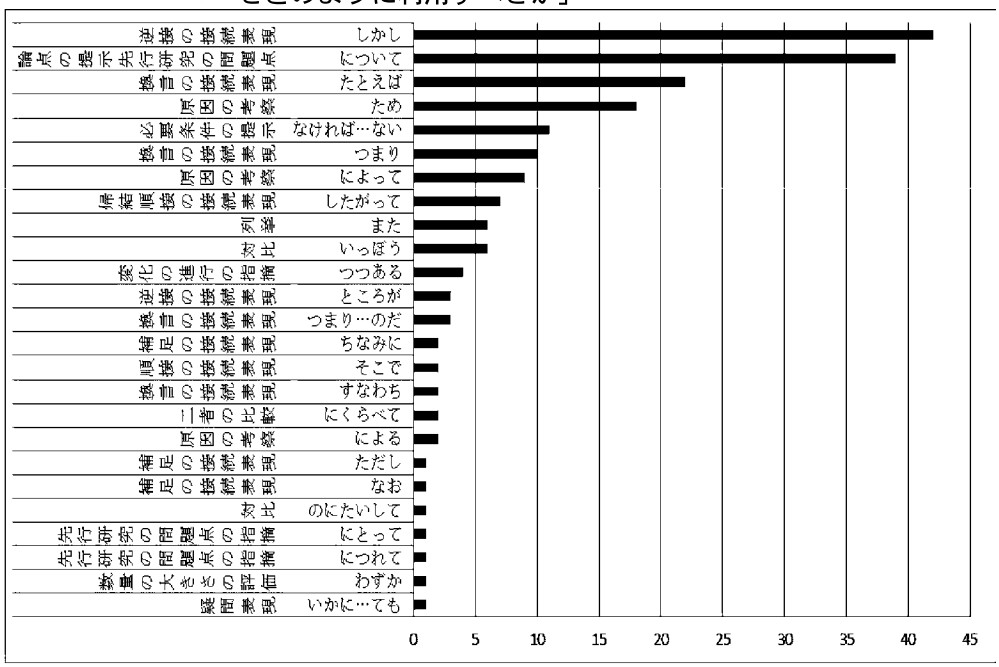


図４　日本人大学生作文の文型使用延べ数（『留学生の日本語』）
「～と私」

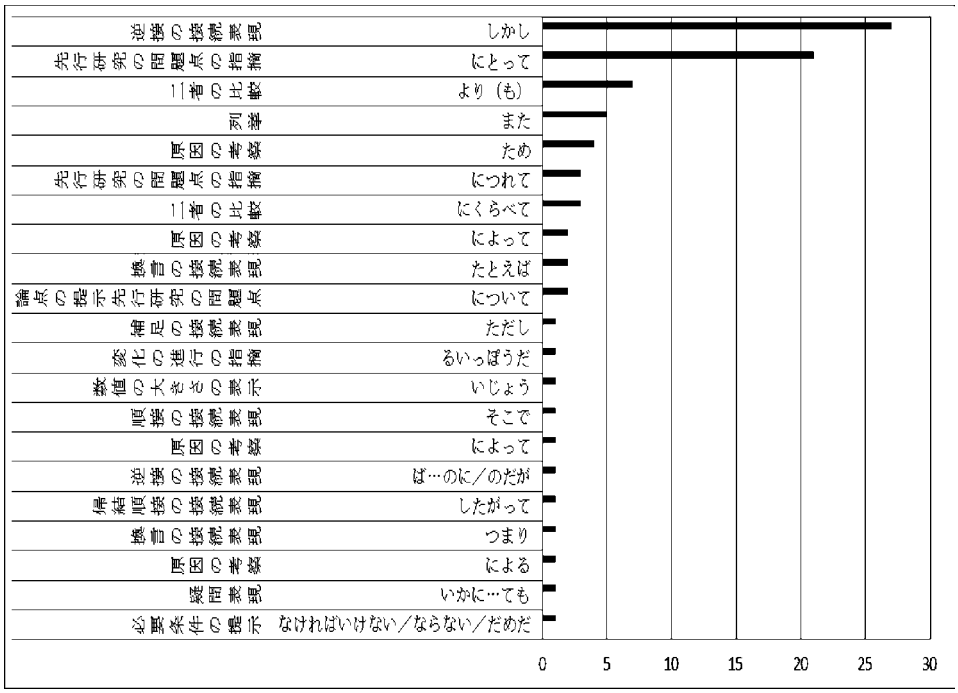


図 1 と図 2 はレポートとエッセーについて文型辞典の文型使用延べ数の多い順に並べたものである。双方の作文に共通して出現する文型と片方のみに出現する文型があることがわかる。「～をどのように利用すべきか」に多い文型は、「また」(付加)、「とは」(話題)、「において」(場面)、「たら」「ば」(仮定条件)、「のだ」(理由・説明)、「だろう」(推量)、「ることができる」(可能性・不可能・能力)、「べきだ」(当為) である。一方、双方の作文に多い文型は、「ような」(例示) である。文章の種類別の使用傾向を踏まえた作文に必須の文型の再整理が必要だと言える。その一方で、文章の種類に関係なく汎用性のありそうな文型も特定し、そのような文型は作文作成の基礎となる文型として学習したほうがよいのではないだろうか。

図 3 と図 4 はレポートとエッセーについて作文教科書の文型使用延べ数の多い順に並べたものである。接続語句の「しかし」「たとえば」「つまり」「したがって」「また」「そこで」「ただし」「ため」、助詞相当句の「について」「によって」「にくらべて」「にとって」「につれて」が使用延べ数の多いものであった。このような接続語句や助詞相当句は双方の作文とも使用例のあった文型には共通のものが多い。つまり、レポート以外の文章でも用いられる汎用性の高い文型として、このような文型はレポート以外の作文にも必須の基礎の文型として学習すべきものである可能性がある。

４．作文の文型使用状況に基づく「基本文型」と「発展文型」の分類

3 では 2 種の作文における使用頻度別の文型の使用状況を概観した。文型の使用頻度の調査結果から、作文一般における使用・不使用文型、使用文型の中でも頻度の高い文型・低い文型に分類される。さらに、レポートとエッセーという種類別の使用・不使用文型、それぞれの種類別で頻度の高い文型、両者に頻度の高い文型に分類できる。

そこで、以上の 2 種の作文の文型辞典の文型使用状況に基づいて、作文の文型として汎用性の高い文型を「基本文型」、特定の種類の作文に限定して使用される可能性の高い文型を「発展文型」と呼ぶことにする。図 5 は作文の文型認定による使用頻度に基づいて「基本文型」と「発展文型」を分類したものを示す。図 5 は作文の文型認定による使用頻度に基づいて「基本文型」と「発展文型」を分類したものを示す (巻末資料参照)。

レポートとエッセーに共通する「基本文型」は文章の種類に関わらず作文一般に使用される文型として学習する必要がある。一方、レポートのみ、エッセーのみの「基本文型」は学習目的によって必要な場合のみ学習すればよいだろう。一方、「発展文型」は表現の幅を広げるために必要な文型という位置づけになる。

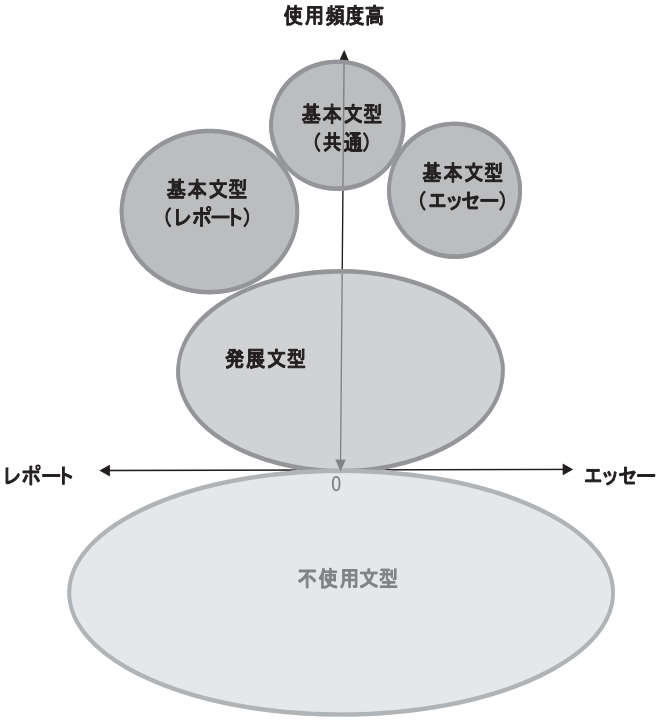


図５　「基本文型」と「発展文型」

使用頻度のみで「基本文型」「発展文型」を認定する場合、頻度は高くなくても作文の基本となる文型もあることも考えられる。そのような文型を特定するには単に使用頻度を数えるような単純な量的な分析ではなく、文章の中で文脈上重要な文章展開機能を担う言語形式を観察し分析する必要がある。しかし、頻度情報は重要な文型を特定するための要因の一つとなる。頻度が高いということは同類の文章に繰り返し使用される可能性があるということを意味する。他の要因の可能性も認めつつ、今回は頻度を一つの基準として分類を試みた。なお、今回の調査は作文数が少ないこともあり、統計的な処理は行っていない。あくまでも予備調査としてどのような文型に着目すれば作文に必須の文型が特定できそうかを推測するものである。

次に、ここで分類を試みた「基本文型」と「発展文型」は具体的にどのような文型か、それらの文型に特徴的な傾向があるかについて検討する。

４．１　レポートとエッセーに共通する「基本文型」

レポート、エッセー両者に共通して多いのは次の14文型で、これらが「基本文型」となる。

「も」（付加）、「や」（列挙）、「など」（例示）、「から」（起点・由来）、「しかし」（逆接）、「ような」（例示）、「たら」（仮定条件）、「ので」（理由）、「だけ」（限定）、「から」（理由）、

「ても」(逆接条件)、「たとき」(時点)、「また」(列挙)、「もちろん」(期待肯定)

列挙「も、や、また」、例示「など、ような」、理由「ので、から」は項目が複数あり、よく使われている。接続語句では「しかし」「また」といった接続詞、「たら」「ても」のような接続助詞も見られる。なお、使用頻度の高い文末表現は見られない。

4.2　レポートの「基本文型」

文末表現の「べき（だ)」(当為）が多く見られるが、これは作文のテーマの影響も考えられる。次いで、「のです」(説明・理由)、「ることができる」(可能性・不可能・能力)、「だろう」(推量）の使用頻度が高い。共通の「基本文型」には文末表現は見られなかったが、レポートでは複数の文末表現が「基本文型」として挙げられる。助詞相当句では「とは」(話題)、「について」(対象)、「として」(立場)、「において」(場面)、接続語句では「また」(不可)、「ば」(仮定条件)、「たとえば」「たり～たりする」(例示)、「ため」「のため」(原因・理由）が挙げられる。つまり、あるテーマを設定して説明・解説を加えるというレポートの文章の特性から、主張や説明の文末表現が多く、助詞相当句でも話題や対象を表すものが多く出現すると推察される。

4.3　エッセーの「基本文型」

エッセーの場合では逆接「が」の使用頻度が高く、共通の「基本文型」の「しかし」も多く見られた。また、前置きの「が」が見られることも特徴的である。レポートでは立場は「として」の使用頻度が高いのに対し、エッセーでは「にとって」のほうが高かった。「てくれる」(受益)、「とても」(程度・強調)、「ても」(逆接）のような、主観的な表現、口語的な表現が見られる。このような文型の使用頻度が高いのは、エッセーではレポートのような論理性を重視する文章とは異なり、筆者の感情のような主観を表現できる文章であり、さらに文体も筆者個人の文体が影響していると考えられる。

4.4　レポートとエッセーの「発展文型」

レポートとエッセーに共通する「発展文型」として次の文型が挙げられる。

「たとき」(時点)、「なら（ば)」(仮定条件)、「かもしれない」(推量)、「れない」(可能性・不可能)

レポートの「発展文型」としては次のとおりである。

「によって」(手段・方法)、「ば」「と」(前置き)、「てから」(前後関係)、「したがって」(推論)、「ではなく」(訂正)、「すぐ」「すぐに」(短時間)、「じゅう」(空間的関係）など

エッセーの「発展文型」としては次の文末表現や助詞相当句が挙げられる。

文末表現の「のだ」(説明・理由)、「たことがある」(経験)、「のか」(質問)、「ほど」(程度)、「から･･･まで」(範囲)、「まで」(程度・強調)、「より（も)」(対比・比較)、「なにか」(不明確）など

「発展文型」に関しても「基本文型」と同じくレポートとエッセーのそれぞれの文章の特性が文型の使用頻度にも反映していると考えられる。レポートでは論理関係を示す表現や感情を交えず客観的に事実や意見を述べる表現が見られる。それに対して、エッセーでは自分のことを語る主観的な表現が見られる。

4.5　使用例のない文型

調査したレポートにもエッセーにも使用例のない文型の意味・機能は以下のとおりである。その中で、双方においても使用されていないもの、あるいは使用されていてもごく少数のものを網掛けで示す。

話題転換、話題、列挙、例示、例外、類似性、量・数の多・少、立場、理由、様子、予想外、誘いかけ、目的・目標、命令、命名・定義、無関係、方向、並立･並列、付帯・非付帯、付帯、付加、不明確、不特定対象、不特定数量、不特定時点、不特定の様子、不特性数量、不確実、評価、必要条件、必要・義務、非難、比喩、比例、比較、否定強調、範囲、反復・習慣、反事実条件、判断、発言、同時、到達、当然、伝聞、典型・非典型、適切性・不適切性、訂正、程度・比較、程度・強調、程度、直前、直後、超過、断定・意見保留、断定、短時間、達成、対比・比較、対比、対象、尊敬・謙譲、前置き、前後関係、選択、説明・理由、説明、推論、推量・否定、推量・仮定、推量、申し出、譲歩、状態、条件・前提、条件、情報源、場面、承諾、所属、順接、十分条件、修正、受益、手段・方法、主張、質問、時点、根拠、限定・唯一性、限定、限界否定、限界・極限、限界、言い換え、原因・理由表示、原因・理由、見なし、結論、結果、決意、継続、継起、経由地点、経過、傾向、空間的関係、禁止、極端な例、極端な程度、極端な手段、驚き、強制、許可要求、許可、逆接、起点、期待否定、期待超過、期待肯定・結果、期待肯定、期待以下、期限、期間中の継続、期間、基準、願望、関連性、感情：後悔、感慨、勧誘、勧告・忠告、確認、確定条件、概数、可能性の否定、可能性・不可能、可能性、仮定例示、仮定条件・確定条件、仮定条件、一般条件、意志・意向、依頼、対比、態度表明、主体、感情、打消し否定、立場

以上の不使用文型を見ると、尊敬・謙譲語、申し出、譲歩、許可要求、命令、勧告、非難、勧誘、依頼といった、相手が想定されるような表現、さらに、感情、感慨、態度表明という意味機能による主観を表すような表現も使われていない。また、条件を表す表現が

使われていないことがわかる。

これらはレポートが筆者の感想ではなく根拠のある意見を述べる文章であり、実験や実証による事実を述べる文章であることによると考えられる。読み手を意識して書くとしてもあくまで論理的にかつ客観的に述べることが重視され、直接相手に呼びかける表現や自分の主観を感情的に直接表す表現は用いられないのはレポートという文章の種類上、予想できる結果である。

主観を表す表現として感情、感慨、態度表明がエッセーでも使用されないのはエッセーもレポートと同様である。エッセーは主観を直裁的に表現する文章のように思われ、レポートに比べれば書き手の主観を表現することができる。しかし、エッセーは相手に直接感情をぶつけるのではなく、描写や説明によって感想や意見を自由に表現する文章である。単に感情を表出するだけではエッセーという文章は成立せず、どうしてそのような感情を抱いたか、どのような状況でそのような感情が沸いたかなどの説明とともに文章化されなければならない。なお、手紙やEメール、スピーチ原稿といった読み手が具体的に想定される文章なら、感情、感慨、態度表明など主観を表す表現の出現頻度が高くなるのではないか。

以上のような文章の種類による表現の使い分けを書き手が意識的または無意識的にしているかは書かれた作文の分析のみでは判断できない。しかし、調査した作文データのレポートとエッセーの書き手が同じ授業の受講者であること、さらに文型の使用状況から見て、書き手は場面に応じた表現の使い分けをしていると推察される。

一方、レポートで条件の表現が「ば」「たら」以外あまり使用されていないのは予想外であった。論理関係によって展開する場合、仮定条件や確定条件など条件表現が多く使用されるのではないかと考えていた。条件表現の不使用はテーマによるものなのか、書き手が条件を用いて論述する方法に習熟していないのか、この理由の解明は今後の課題である。

5．おわりに

以上、文型辞典と作文教科書に「文型」として抽出された言語形式について、実際に大学生の作文で使用される「文型」が作文作成のための言語資源としてどの程度活用されるのかを検証した。文章の種類別に文型の使用頻度が異なることは従来の日本語教育の研究でも指摘されてきた。しかし、学習者が活用できる言語資源という観点から「文型」の使用状況を検証した結果、表現に必須の文型を目的別により限定していく必要があるのではないか。

文型辞典や作文教科書に学習に有用として抽出された「文型」であっても、使用数は文章の種類によって限られていると推察される。一方、限られた数の文型の中に、どのような種類の文章でも作文作成に必要な汎用性の高い文型が含まれている。初級、中級、上級といった習熟度による文型学習とは異なった観点から文章の中で使用する文型を分類する必要があると考える。

付記

本稿は2012年８月18日に名古屋大学で行われた日本語教育国際大会における発表をもとに修正・加筆したものである。本研究はJSPS科研費 23520611（学術研究助成基金助成金基盤研究Ｃ　平成23～25年度）の助成を受けたものである。データ収集・作成にご協力くださった方々に感謝いたします。

巻末資料

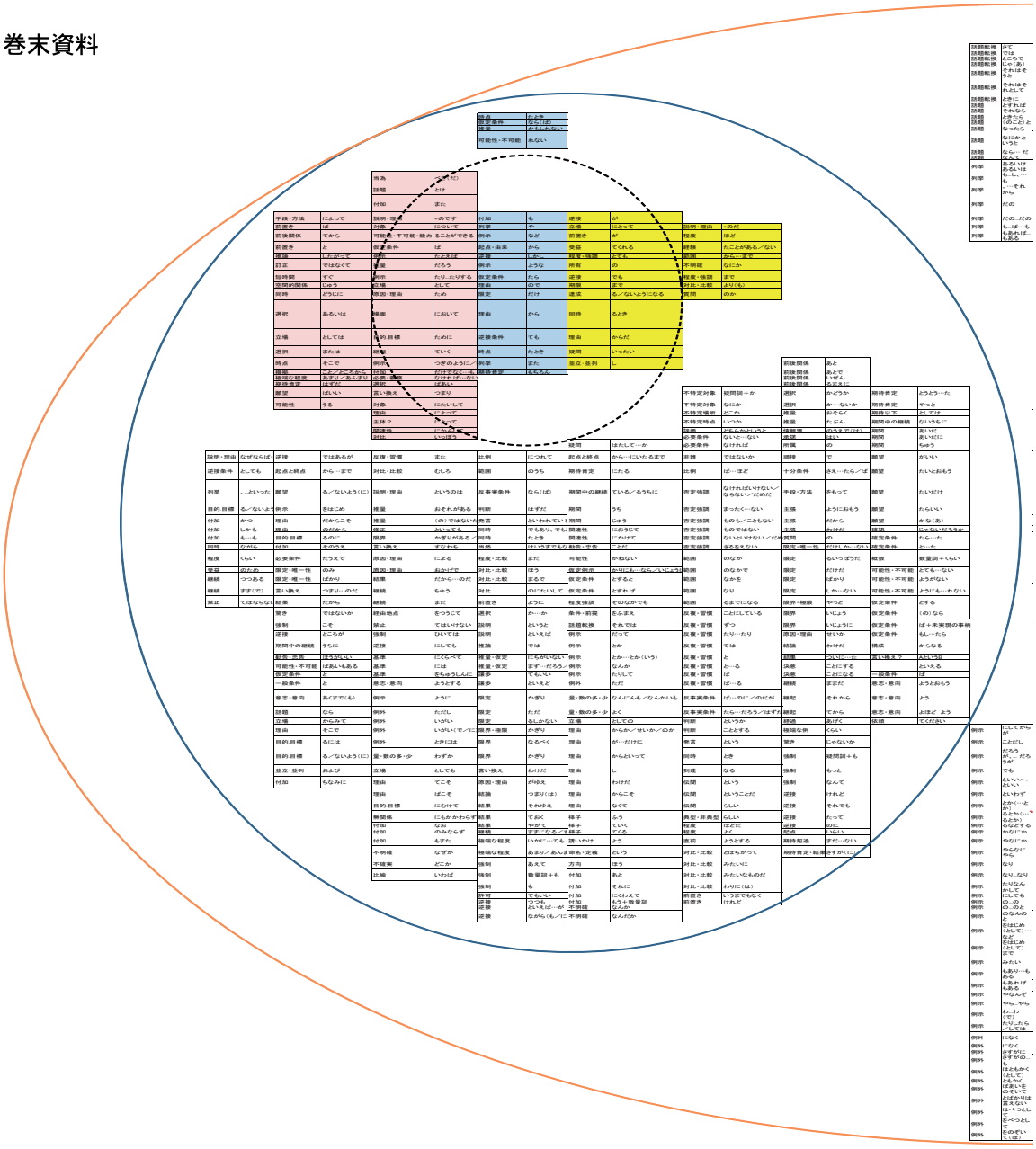
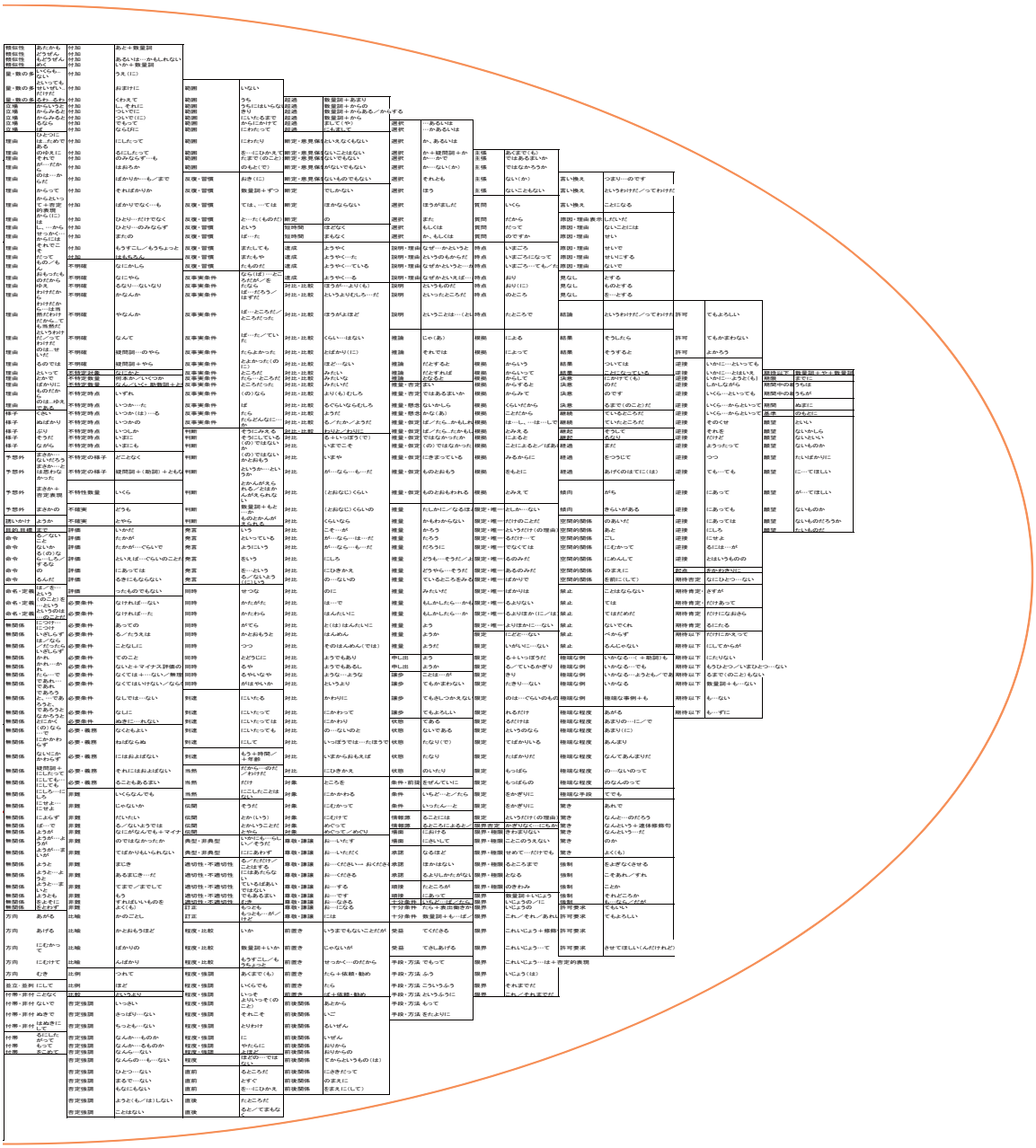


図６　２種の作文の文型認定に

参考文献

グループ・ジャマシイ編著（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
アカデミック・ジャパニーズ研究会編（2005）『大学・大学院留学生の日本語④論文作成編』アルク



基づく「基本文型」と「発展文型」

表５　レポートとエッセーに共通する「基本文型」の使用延べ数と例文
（文番号は「その例文が出現した文番号／その作文の全文数」を表す）

用法	文型			レポート		エッセー		レポート	出現環境		エッセー	出現環境	
				日本人	留学生	日本人	留学生	例文	段落	出現文番号／全文数	例文	段落	出現文番号／全文数
付加	も			118	16	47	9	さらに、定期的に飲酒に関係ある臓器の検査を受けて、自分の健康状態をチェックすることも重要である。	2	18/18	たまに何か理由づけて手伝いをさぼるときもありました。	2	4/12
列挙	や			89	13	20	2	具体的に言えば、薬物や凶器、犯罪に関するホームページである。	3	21/28	それに加えて今後はたくさんの土地や人間を見てみたいと思う。	3	13/13
例示	など			69	13	14	1	最近では、小学校などでもインターネット学習が行われ、ますますニーズが広まっている。	6	13/36	本と言っても誰もが知っている文学作品などははずかしながら、ほとんど読んだことがない。	1	4/13
起点・由来	から			49	17	31	7	世界に通用する選手を日本から排出していけるようにレベルアップしていくのである。	1	11/11	しかし、もし、テレビやラジオからたくさんのいろんな情報があふれている現代社会から隔離された場所に行くとしたならば一体どうなってしなうのだろうか。	1	4/9
逆接	しかし			42	6	27	4	しかし、インターネットの普及に従って、さまざまなインターネット関連の事件が新聞紙上をにぎわしている。	1	5/16	しかし、携帯電話を買い、友人に番号を教え、友人の番号も電話帳に登録する。	1	5/14
例示	ような			25	3	22	0	そのような今の日本の受験制度の是非は別として、そもそも、学問をする場としての学校としてどうかと思う。	3	29/38	そして日本や世界の至る所に長野のような故郷と呼べるところを沢山作りたいです。	2	8/14
仮定条件	たら			23	4	8	0	しかし、もちろん生活全てにはならないであろうし、なってしまったら非常に危険である。	1	12/14	そんな人を見かけたら私は伯母を思って手をかすことにしている。	3	17/26
理由	ので			19	0	13	1	なお、女性の場合、男性よりもお酒に弱いとされているので、適量をやや控えて考える必要がある。	1	17/18	生活の大半をメディアに頼っているのでその消滅は自分の生活の消滅を意味します。	3	13/16
限定	だけ			18	2	10	0	上述してきたように、もはや偏差値だけによる大学選びで、一生、安泰という訳にはいかない時代なのである。	1	39/51	自分にとって有用であるか、または一般的な意味で価値がある内容についてだけ、注意力を集中させて読むという方法だ。	5	20/21
理由	から			12	1	8	3	学校は社会に出る前の準備段階なのであるから、校則はとても意味のあることである。	2	5/38	きっかけとしては単に友達がそのチームに入っているからという単純なもので、プロを目指すとかうまくなってやるという気持ちはほとんどなかったと思う。	1	4/48
逆接条件	ても			9	2	15	0	どちらにしても、「何とかして時間を使わなきゃ」と思い焦ってしまう、ということはあると思う。	1	6/23	それが見返りであっても構わない。	3	19/26
時点	たとき			8	0	6	5	初めて手にした時は、いつどこで使おうか、と思いを巡らせたものだが、次第にその使用範囲の狭さに気付かされた。	3	17/28	この春、僕が一人で東南アジアを旅していたとき、「お父さん達は君がとても心配」とメールを送ってくれた。	3	7/13
列挙	また			6	0	5	0	その際自分自身の身体的、精神的な異常をもたらすだけでなく、家族や友人、また仕事や日常生活にまで影響を及ぼすこともある。	1	1/18	剣道は先輩と後輩との上下関係がものすごく厳しく、また練習も想像以上につらいものです。	2	6/20
期待肯定	もちろん			4	0	7	0	しかし、もちろん慎重に行うことが必要なので依頼主の夫婦と代理母となる女性とその夫に丁寧に説明して意思を確認してから行うことが大切である。	1	16/17	もちろん一年生は雑用ばかりでボールをまともに使う練習はなく、声出し、球ひろいの毎日が続いた。	1	8/48

表6　レポートの「基本文型」の使用延べ数と例文

用法	文型			レポート		エッセー			出現環境	
				日本人	留学生	日本人	留学生	例文	段落	出現文番号／全文数
当為	べき（だ）	べきである		67	11	4	2	このレポートでは、アルコール（お酒）の影響の良い面と悪い面を挙げ、アルコール（お酒）をどのように利用すべきかについて述べる。	2	3/18
話題	とは			63	8	6	0	遺伝子とは生命の最も基本的な単位であり、遺伝子を操作することで生命活動の根本を変えることができる。	1	1/38
付加	また			53	6	5	0	また、遺伝子組み換え食品は消費者の望む性質に改良することができる。	3	16/38
説明・理由	+のです	のである		47	3	0	0	このように、上述した事をまとめてみると、携帯電話には良い面も悪い面もあるのだ。	1	25/30
対象	について			39	9	2	0	だから礼儀作法についてはとてもうるさく、厳しいものがあります。	4	14/20
可能性・不可能・能力	ることができる	ことができません、こともできません		37	3	3	0	また、各大学の学生は、社会的に自分の大学がどのように評価されているのか知ることができる。	3	25/51
仮定条件	ば			26	5	4	0	このことを組み合わせれば、合法的に悪いことをする人が出てくる可能性がある。	2	33/41
例示	たとえば			22	3	2	0	例えば、日本にいてイタリアの高級ブランドの商品が欲しいとする。	5	22/41
推量	だろう	でしょう		21	3	4	1	これから先小売業、飲食業などサービス産業店は増え続け飽和状態になり評価の低いフランチャイズ店は消えることになるだろう。	1	17/18
例示	たり...たりする	たりする		20	1	2	0	「インターネット」とは世界最大のコンピューターネットワークであり、世界の情報を得られたり、世界の人々とメールができたりするものである。	1	1/16
立場	として			19	1	4	0	私は学校とは単に学問をするのがメインなのではなく、社会人として世に出る前に世の中の常識や人との関わりかたなど、根本的な土台を形成する場だと思っている。	2	4/38
原因・理由	ため	のため		18	4	4	3	むしろ現在では、ほとんど流通していないため、話題にのぼることすらなく、悲しくも忘れられつつある。	1	14/28
場面	において			18	2	3	0	第二に、また例をあげると、学校で勉強したことが実際の生活において何の役に立つのかと疑問に思っている人が私のまわりにもたくさんいる。	3	16/38
目的,目標	ために	のため（に）		15	6	2	2	私達消費者がよりよいサービスをフランチャイズ店からもとめるためにはより厳しい目でフランチャイズ店のサービスを評価し、ライバル店どうしの競い合いを刺激することが大切である。	1	18/18
継起	ていく			14	2	9	0	人を思いやる気持ちというのは生きていくなかで一番大切なものの一つだと私は思う。	1	9/38
例示	つぎのように／いかのように	このように		12	1	3	0	このようにインターネットは非常に開放された場である。	1	25/41
付加	だけでなく…も	だけではなくて・・・も		12	0	2	0	その際自分自身の身体的、精神的な異常をもたらすだけでなく、家族や友人、また仕事や日常生活にまで影響を及ぼすこともある。	1	10/18
必要・義務	なければ…ない			11	2	0	0	悪い面に関しては規制基準をきちんと設置し、大人がきちんと子供（青少年）を管理しなければならない、そうした基準をきちんと守れば青少年の「心」がもっと良い方向へ発展するはずである。	1	17/17
選択	ばあい			11	1	0	0	現に旧厚生省が99年、全国4000人を対象に意識調査をした結果、自分が不妊とわかった場合、代理母のひとつである借り腹を「利用したい」「配偶者が賛成したら利用したい」と答えた人は合わせて31%にものぼった。	2	8/17
言い換え	つまり			10	2	1	0	つまり、子供の頃は学校で、大人になっても社会という場で学んでいるのだ。	2	12/25
対象	にたいして	にたいし	にたいする	9	5	2	1	しかし、医学は人々に対して良い役割を果たしているだけでなく、悪い役割を果たすこともある。	1	7/14
理由	によって			8	0	2	0	また、最近では電話やメールの普及によって人と直接会ってつまり表情やしぐさ、身振りを見ずに会話やコミュニケーションが可能になった。	2	18/26
主体	によって			8	1	1	0	つまり世界に動きがある以上、新聞が朝、家に届く頃、新聞記者によって書き上げられた時点での最新ニュースは、新聞が家に届いた時点での最新ニュースになれないのは当然である。	1	7/41
関連性	にかんして			7	0	0	0	実験段階の安全性は科学技術庁の実験指針に基づき、環境への影響に関しては農水省の指針に基づいてチェックされる。	4	25/38
対比	いっぽう			6	7	0	0	どのような薬にも、症状を改善し、病気を治す「主作用」がある一方、からだに危険な作用をおよぼす「副作用」が存在する。	1	9/19

表７　エッセーの「基本文型」の使用延べ数と例文

用法	文型			ﾚﾎﾟｰﾄ		ｴｯｾｰ		エッセー	出現環境	
				日本人	留学生	日本人	留学生	例文	段落	出現文番号／全文数
逆接	が			2	1	30	2	自分が携帯電話を使用しているが、実は携帯電話の方が私を使用しているようにも考えれなくもないような気がする。	1	13/14
立場	にとって			1	0	21	2	家族は自分にとってとっても大切なものだと思います。	3	14/15
前置き	が			0	0	20	2	その9年間の野球を通していろいろまなんできたが、一番学んだと思うことは、やはり人としての常識の部分だと思う。	1	4/8
受益	てくれる			7	0	17	1	理由は、自分の愛情にこたえてくれるし、多くの感情表現を持っているからです。	2	3/9
程度・強調	とても			0	0	16	0	突然、自分が今ここにいて、こうして生きていることがとても奇妙なことに思えた。	1	4/21
所有	の			6	3	14	6	僕の父は現在単身赴任していて会うことは程んどない。	1	1/13
逆接	でも			0	0	13	0	でも、その生活が私は今でも一番好きです。	1	13/14
期限	まで			0	0	11	1	中学の時までは一緒に釣りに行ったり、キャンプに行ったりしていた。	1	2/13
達成	る／ないようになる			0	0	11	4	そして夏が来て３年が抜けた後、やっとまともな練習ができるようになったのだが、２年生だけで20近くいて、一年生の中にも私よりうまいやつはゴロゴロいてとてもレギュラーになんかはなれなかった。	1	10/48
同時	るとき			5	1	9	0	実家にいる時は家に一人でいると、せいせいとした気持ちになりました。	2	11/15
理由	からだ			0	0	9	0	現代調和体のような感賞を与えてくれるからだ。	6	9/12
疑問	いったい			0	0	9	0	そしてそれが実現に近づけば、自分は一体誰なのか、答えの糸が見つかるような気がしている。	4	21/21
並立・並列	し			0	0	8	0	私は先パイ達が一生懸命練習していたのを知っていたし、先パイ達のうわさも知っていた。	2	42/48